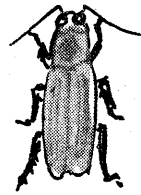


子どもと生活空間



古 沢 頼 雄

六月号では、「子どもと時間」という題のもとに子ども
の生活の中で時間をかけること、時間がかかることが子ども
も自身新しい経験を、自分でしかも自分のものとして獲得
していくための基盤として必要であろうということを述べ
てみましたが、今回は子ども生活とそのため空間との
関連を、子どもの心の発達に焦点をあてながら考えていっ
てみたいと思います。

樹木や草花が狭い場所に密集して植えられるとお互いの
枝・葉が日影をつくり、ぶつかり合い、地中からは一本一
本が十分な栄養を摂ることができなくなってしまうため
に、結局はどれも力一杯に成長することができず仕舞いにな
ってしまいます。それとちょうど同じことが動物の世界

においても言えます。生活圏の中あまりに多くが一緒に
なっていると、身体的にも心理的にも悪影響があることは
これまでいろいろと実証されています。たとえば、白ねず
みに彼らの住み家としてまったく同じ大きさのかがごを二つ
用意し、一つのかごには大きさの割に、見るからに過密で
ある位の数のねずみを入れ、他方には一匹一匹がよく動き
まわることのできる位の数のねずみを住まわせるようにし
てみると、前の場合の方が一匹一匹のねずみの成長がとみ
に悪く、心理的にも不安定な行動を示し、また、死亡する
ねずみの数も後者に比べてはるかに多いということが示さ
れています。このことから、すぐ、ねずみ一匹当りの空
間が広いほどよいという結論をいきなり持ち出すことはで
きません。というのは、同じ広さのかがごにたった一匹だけ

を住まわせてみると、そのねずみはだんだんと動作が不活発になり、心理的な障害をおこしてくるというところもいわれていたからです。したがって、ねずみの場合には、中庸的な生活空間と、他との交流のあることが保障されることが生活上必要であるといえるのでしょうか。

ところで、人間の場合には、このような影響はどのようなかたちで表われていくのでしょうか。

二つの面からその影響を考えていくことができると思います。

その一つは、いままで述べて来たような生活圏そのものがそこでの、その時の人間の行動を規定していくのであります。

もう一つは、生活圏の様相そのものが、そこで出会うことに対するとらえ方を規定していくだけであって、いつのまにか個人の行動の中にくみこまれて、そこを離れてからも依然として影響をもち続けていくということです。大げさにいえば、いつとまのことが人間一生の問題につながっていくということです。

次のような例はまたニューモアを含んだ話として私たちに伝わって来ます。

三畳にないこと下宿していた人が、ある機会に今度は十畳を借りるようになって、住みはじめたところ、さて、いままでよりずっと広い部屋をどう使うか、自分はいつどこにいたらよいかなど、なんとなく落ちつかずにまごまごしてしまったということなのです。つまり、この人の場合、毎日三畳の部屋で生活しているうちに、その部屋を用いるのに適当な習慣が、知らず知らずのうちに身につけてしまつて、心一つの「わくぐみ」ができ上がつていったがために、物理的な環境が変わつても心理的に新しい環境に適応することが当座のところできないために、とまどいとなってあらわれたということなのでしょう。このことは、いつも規制された中で生活していると規制がある中ではそれに従つて行動をおこすことができるのですが、一度規制があたえられない機会に出会うと、まったく自分からは自発的に行動をおこすことができないうち、というところにつながる問題が含まれているとみることができましょう。

ところで、子どもの生活空間を考えてみるときに、いままで述べて来たような物理的な問題が心理的に影響してい

くということだけではなく、生活空間が狭ければ、大人の世界と同じ空間にいわせなければならなくなり、それだけ人が子どもの世界に介入してることが多くなるという結果を生んでいくと考えられます。それは、いまの社会的通念からいって大人と子どもが共存したり、子どもの世界に道をゆずるよりはむしろ、大人の絶対性が常に優先しものごとが考えられるからだといえましょう。

たとえば、少しの物音が隣人の生活にひびくような住いの構造と空間の中で生活をしている場合には、少しばかり子どもが騒いでもすぐに隣人のことを気づかって子どもを止めて静かにさせるということがおこってしまうかもしれません。

もちろん、このような条件のもとでの生活自体を否定するつもりは筆者にはありません。もっと他ののびのびとした条件のもとで子どもの生活を送ってあげたいと思っただけでも、そのような生活をせざるをえない、その中で子どもを育てていかなければならないわが国の社会的状況を無視して、そのような行為を子どもに対してしなくてはならない大人が悪いと言いつけることはできません。筆者がここで取り上げたいのは、そのような状況の中で、大人の子

どもへの知らず知らずの介入が生じていることに大人の方が気づき、その場の解釈を子どもに原因があるというようにとらえて禁止するという、最も手近な方法を出発させるのではなく、より創造的な解釈を生み出していこうとする姿勢に立つことを積極的考慮することです。

大人は子どもよりも生活経験が長いためか、どうしても自分のわくをもって物事を見てしまいがちです。見るだけならばまだよいとしても、それを他人におしつけてしまうということをしてしまいます。そのことが場合によっては「しつけ」とか「教育」といわれてしまっている時もあるようですが、要するに相手の気持ちや意志は無視されてしまうわけです。大人と子どもが近い距離にいて、生活を送るとどうしてもこのような大人の動きが、次々と子どもに対して向けられてしまうということです。いわゆる「見てられない」という大人の気持ちなどその端的なあらわれともいえるでしょう。その場その場だけの判断がすべてに先行してしまうのです。このことは、生活空間の広さと決して無関係ではないと考えられます。遠くから見たいられることも、近くにいると手を出したり、ことばにしたりしないといられないということは子どもにふれるすべての場面

でいえることでしょうか。

さて、もう一つとりあげることは、子どもの生活空間の構造が大人の考え方によって一方的に規定されているということについてです。

たとえば、日本のいたるところで都市化が進んでいる中で、以前は子どもたちの格好の遊び場であったあき地は次に姿を消し、道路は、人間が歩いたり、遊んだりする道ではなくなり、クルマのために存在する通路となってしまっています。ほんのついたり程度に作られる公園は、コンクリートでかためられた建築家の夢だけをかなえたような造形物で、子どもが自分たちで作り上げる遊び場という余裕はとてもないものとなってしまっています。

「外で遊べといわれても、危険だ！ 迷惑だ！ 立入禁止だ！ といわれて何で遊べるか」ということを表現した子どもの詩を目にしたが、確かに、私たち大人は生活の場を構成するときに、大人だけの論理によって、ことを進めてしまっている傾向が大いにあります。園庭の舗装ということは、確かに園舎を清潔に保つための条件かもしれませんが、また、園庭の管理に要する費用も一度舗装をして

しまえば、節約できることで、あるかもしれません。しかし、そこには土自体のもっている感触も、泥こねに發展するおもしろさも、シャベルを使って掘りかえす楽しさも存在しなくなり、ただのこるのは頭を打ったり、すりむいたりする身体的危険だけです。そして、大人は子どもの身体的怪我を恐れるがために思い切り遊ぼうとする子どもを制止し、いつも、そろそろとしか遊ぶことのできない場になことをしてしまうのです。

子どもたちが、自分たちの生活を自分が行っているという実感をもてるためには、彼らが、そこを「いま」自分たちで機能できる場所と時間としてとらえることが、まず必要なのではないでしょうか。と考えると、空間的にも、時間的にも、現代生活は子どもに生活する気持ちをおこさせないように、彼らを追いやってしまっているといえましょう。大人の生活の谷間に子どもの生活が存在するのではなくて、一個の人間としての子どもの生活が確保できる、そんな状況を実現化し、子どもの側に立って発言し、指向していくことが、子どもたちの将来のためにもっと必要なのではないかと考えないではいられません。

(日本女子大学)